

住まい、ル新聞

日本ステンレス工業株式会社

発行/日本ステンレス工業株式会社
〒409-0617 山梨県大月市猿橋町殿上630-1

電話=0554-22-2500

FAX=0554-22-5234

4月号

Vol.125 2010

大月人物伝 庶民の医療に心血を注いだ 平井 圭齊

「少而学。則壯而有為。壯而学。則老而不衰。老而学。則死而不朽。」
(少にして学べば、則ち壯にして為すこと有り。壯にして学べば、則ち老いて衰えず。老いて学べば、則ち死して朽ちず)と読む。

分かり易い日本語に訳すと、「子供の時にしっかりと勉強しておけば、大人になってその事が役に立ち、人の為になんか出て来る。大人になっても尚学ぶという気持ちを持続するならば、ボケることもない。年を取ったからといってぼんやりせずに、常にチャレンジ精神を持続するならば、何等かの形で社会に貢献できるだろうから、死んでからもその人名が忘れられることは無い」と言うような意味である。もっと端的に表現するならば、「生涯学習の大切さ」を説いた言葉である。これは江戸時代の儒学者佐藤一斉の著書「言志四録」の中の一文である。この言葉は儒学に通じていた平井圭齊翁が、その生涯を通じて生活の指針として好んだ言葉であると同時に、彼は実際にその言葉の通りに生きた人でもある。

日、現大月町真木一七九五番地に十代目七兵衛の長男として生まれた。平井家の祖は平井四郎清隆といい、北巨摩地方に居住して武田家に仕え、武田騎馬軍団の駿馬を育成する役目を負っていたといわれる。武田家滅亡後、初代清隆からは十二代目となる当主が真木に移住した。慶長年間(一五九六年〜一六一四年)の事である。この慶長年間には、天下統一を果たした豊臣政権の栄光と滅亡を経て、徳川長期政権に代わる激動の時代でもある。(因みに、江戸幕府開府は一六〇三年である)

真木に移住した平井家の当主は、以来代々七兵衛を名乗るようになり、当初平井家の家業は牧畜や農業であった。初代七兵衛は先祖からの伝統を受け継ぎ、駿馬の育成に心血を注いだので、馬の病気にはことのほか詳しく、その医療に力量を発揮したが、医者にはならなかった。しかし初代のそうした医療への関心が、次代←圭齊へと受け継がれてゆくことになる。真木に移住してからの当主の勤勉さとたゆまぬ努力の結果、平井家はやがて村方三役(名主・組頭・百姓代)を務めるよ

うな地位・財産を築くのである。三代目七兵衛は一六六九年(寛文九年)真木・浅利・小形山・初狩の組合検地(現在の課税台帳整備)役を命ぜられたが、所有の土地を小作名義に分割して、共存共栄を図るような進歩的な人物であったし、圭齊の父もまた和漢(国文・漢文)の学に長じた人で、一八五六年(安政五年)自宅に「玄堂塾」を開いて、地元はもとより近村の子弟の教育に当たるなど、革新的な家風を有した旧家である。

十一代当主の圭齊は、七兵衛は名乗らず、幼名を敬太郎通称を功といい、圭齊と改名したのは医者を目指してからである。圭齊の父十代目七兵衛も、医者になりたいと願ったが、家の事情で目的を果たせなかった。そんな父七兵衛の夢を託され、圭齊が医学の道に進んだのは十三歳の時であった。圭齊の医学の先生は永島安竜で、その永島安竜の先生は伊東玄朴と称し、現東大医学部の前身である「種痘所」を設立した人物である。

痘(ほうそう)の撲滅に奔走したことその名を知られた人である。玄朴は長崎でシーボルト(ドイツ人の医師・博物学者。一八二三年オランダ商館の医官として来日、日本研究を行うとともに、長崎に開いた鳴滝塾を通じて日本人学者に医学知識をひろめた。また日本の事をヨーロッパに紹介し、江戸幕府の開国にも寄与した人物である)から蘭方医学を学び、モーツァケ(一八一四年〜一八八七年のオランダの医師。オランダ軍医となり、嘉永元年(一八四八年)長崎のオランダ商館に赴任。聴診器をはじめて日本に紹介した人である。翌年佐賀藩医榊林宗建に協力し、バタバ(ジャカルタ)から牛痘苗をとりよせて接種に成功。これ以降種痘が日本に普及した)から種痘術と痘苗の作り方を学んだ。



裏面に続く↑

同時に明治政府は明治十七年に「日本医籍」を制定し、医師として認定した者に、一連の番号をつけて登録する制度を施行した。

勿論圭齊の名前も、医師番号と共に現在も厚生省に保管されている。

廃藩置県によって鎮撫府←甲斐府←山梨県となったのは明治四年十一月二十日（現在の県民の日は、この日を記念して制定された）である。

明治二年圭齊は、恩師の息子の元長等と共に、郡内六十一名の医者代表として甲斐府病院←甲府病院（現県立病院の前身）の設立に奔走した。そして圭齊達の悲願であった甲府病院分院が谷村に出来たのは明治十年のことである。

診療所を開いて十年、三十三歳の時北都留郡医として、郡内四地区の内一区を担当した圭齊は、「医師取締」に就任したが、公務は公務として本業を疎かにはしなかった。（注・医師取締とは今でいう医師会の会長と衛生行政を兼務したような役職）それは医学を志した時から、患者に対して博愛と仁徳を施すことを旨としてきた圭齊の信念が、ゆるぎないものであった証拠でもある。

圭齊は大正十二年三月三十日八十歳の生涯を終えている。

圭齊の医療は「病氣」と言う媒体を通して、病人との親愛に満ちた関係をつくることにその根本を置いていた。このことは圭齊の死より数十年後の昭和二十五年十二月に、二十号線沿いに建立された「仁徳之士平井圭齊先生頌徳之碑」が証明している。つまり圭齊の仁徳の恩恵に浴した者たちが、子々孫々までその徳を語り継いだ結果である。

幾つかのエピソードを紹介すると、

○診療所に入入りする患者が、柱などで怪我をしないうように、目立つ所に注意書を貼った。

○患者の目線で話をきいてやり、悩み事にはユーモアをまじえて相談に乗り、病気の苦痛を訴える者には、慰めの言葉一つにも心を砕き、闘病心をかき立てさせ、病気が快方に向かうように指導した。

○急患の知らせを受けると、どんな夜更けでも往診に応じた。

○診療の支払いはその都度支払う者もいたが、多くは正月年始の挨拶を兼ねて、一年分の診療代を気持で置いていったが、その殆どは患者に施す薬の

仕入れ代に消えた。

○貧しくて診療代の支払えない者は、圭齊の所有する田畑の耕作や養蚕の手伝いで相殺してやった。

○往診は基本的には徒歩であったが、老境に入ってから、遠方になると馬か安竜先生から贈られた駕籠を使ったが、馬でも駕籠でも行けない所へは、杖をついて駆けつけたなどである。

圭齊自身の衣食は常に質素で、金儲けとは凡そ縁の無い一生を終えた人でもある。実母は彼が十歳の時に他界し、父の再婚後に生れた四男五女の長兄として一家を支えながら、真木という片田舎で患者への慈悲と献身に徹した彼の一生は、正に「名医」というに相応しい。

映画等で有名な「赤ひげ先生」は、徳川吉宗時代に小石川養生所で活躍した仁愛の江戸の名医だが、その生涯を山村の医療に捧げた圭齊は、さしずめ山村の「赤ひげ先生」だったと言える。

父の再婚後に生れた末弟の徳五郎（明治元年〜明治二十一年）は秀才で、徽典館（甲府一高の前身）を経て、第一高等学校医学部（現千葉大学医学部）に入

学。平井家では、圭齊の漢方医学と徳五郎の学ぶ西洋医学によって、地域医療に貢献出来ると期待したが、徳五郎は卒業を目前にして病気で他界。七兵衛・圭齊父子は勿論、平井家を知る全ての人々に深い悲しみをもたらした。

圭齊は診療の傍ら、父の開いた「玄堂塾」で、青少年に漢籍（中国の書籍）・日本外史・書道等を教え、自らも数多くの漢詩を作っている。そのうち四百八十篇が現存する。その中から薄倅だった弟の為に詠んだ詩と、大正十年七十七歳の時に、開業して六十年の医療生活を省みて詠んだ漢詩を紹介する。（二編の漢詩解釈は筆者の勝手な解釈ゆえ、正確ではないかも知れませんが…）

登猪鼻山懐亡弟（猪鼻山に登った時の、亡き弟を懐かしみつづ…）
嘗伴元貞徳五郎
登山歎語発吟声
弟兮長逝歸冥漠
彷彿如在淚數行

かつて私は徳五郎と一緒に山（猪鼻山）に登り、喜びを語り詩（うた）を歌った。弟は亡くなって冥土に旅立ってしまったが、まだ何処かで生きているような気がして、涙を流すことがある。

注・猪鼻山（現在の千葉県猪鼻公園内にある高台）

元旦偶成

（元旦に思いつくままにつく）

六十年来開業医
恒以博愛慈仁施
生涯如夢嘗無事
懷出拳鞭汗馬時

六十年間開業医として働いてきた。常に博愛の心で（患者）に接し、仁徳を施すことに留意してきた。そんな日々が（今は）夢のように過ぎ去った感もあるが、（幸い）今の所無事に過ごせている。（若き頃緊急往診時に）汗馬に鞭を挙げて走らせた事が懐かしく思い出される。

圭齊がかって師事した浅田宗伯は、浅田飴の考案者としても知られるが、明治十二年から十年間、東宮侍医として皇室にも仕えた人である。彼は漢方医学とドイツ流西洋医学の融合を唱えたが、宗伯の死後、政府は漢方医の養成を認めない法律を制定した。漢方と西洋医学の併用実践者でもあった圭齊にとっては実に心外なことであったと思われる。それゆえ彼は、真木という片田舎で仁徳の医療を続けながら、生涯学習を自らに課す生き方を選択したのかも知れない。

圭齊が自宅兼診療所とした平井家の母屋は、現在も昔の姿そのままに現存する。その庭には、圭齊が薬用の甘味剤として植樹した「なつめ」の古木が、圭齊の生き方を物語るかの様に厳然と、そして土地の人々を優しく見守るように、風雨に耐えながら季節の風に揺れている。

圭齊の嫡孫である徳木氏は、県立高校及び日大明誠高校等で教鞭を取ったが、その人柄は大変温厚であった。平井家は今曾孫の光宏氏（一橋大卒）によって立派に守られている。そして圭齊の身は今「大悲院積圭宗居士」として、平井家の菩提寺真木山福正寺の墓寺（墓地は正念寺）に眠るが、その生き様は「頌徳之碑」として残り、時を経ても折に触れて語り継がれてゆに違いない。

参考資料

青少年のための山梨県民会議編「郷土史に輝く人々」第十六集

資料提供 平井 光宏氏

執筆 小俣 早苗